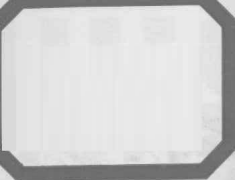




名目是
作本二
世叔刀
家新



芥川龍之介 生門トロツコ

●ジュニア版日本文学名作選——〈6〉●芥川龍之介●偕成社

《原作を全文収載》

羅生門・トロッコ（ジュニア版日本文学名作選6）

昭和四十年四月二十日 発行

定価 二百九十円

著者 芥川龍之介

発行者 今村 広

印刷者 中村 櫛

印刷所 新興印刷製本株式会社

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ガ谷砂土原町二の四

振替 東京一三五二番



※この本について

高木 卓

芥川龍之介は、「大正」が「昭和」とかわつてから、わずか七か月ほどのちの昭和二年（一九二七年）七月、みなさんもたぶんごぞんじのように、自殺してこの世をさりました。まだ三十五才の若さでした。

「東京に生まれ、東京にそだち、東京に住んでいくべく」と、芥川龍之介は、三十一才の秋、ある隨筆にかきましたが、それから満四年たたないうちに、やはり東京で、早くも世をさつていったわけです。

生活した場所からも、そうして活動した時代からも、芥川は、あくまでも東京人らしい、また大正時代人らしい作家でした。

しかし、そうだからといって、作品まで、東京を舞台にした大正的な現代小説ばかりだろうなどとは、かりにも思わないでください。芥川ほど、時代も舞台も多種多様な作品をかいた作家は、めつたに見あたらないくらいです。

この本は、芥川のいろいろな作品をあつめて、芥川がどんな作者であつたか、どういう点がすぐれているか、さらに、どういう点がものたりなかつたかまでも、知っていただきたいと願っています。

芥川の一生や、その作品についてのことは、本のおわりの解説にゆずりますが、作品は、どうかくりかえしてよんでください。

目次

芥川龍之介

● 羅生門 6

● 鼻 17

● 芋粥 29

● 手巾 58

● 戲作三昧 72

● 枯野抄 115

● 毛利先生 130

● 蜜柑 154

● 魔術 161

● 杜子春 176

● トロツコ 196

●報恩記

..... 205

●仙人

..... 234

●三つの宝

..... 241

●白

..... 257

●子供の病氣

..... 272

●蜃気楼

..... 283

●解説

..... 304

東京大学教授
高木卓

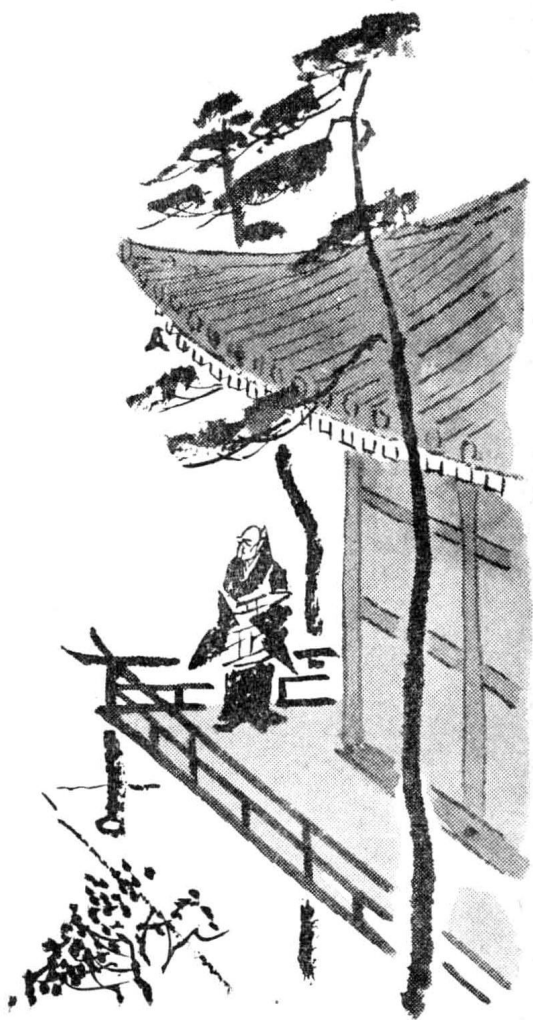
装幀―A D 沢田重隆・D 坂野豊

さし絵―太田大八



羅生門・トロツコ

ジュニア版日本文学名作選——(6)芥川龍之介



羅生門

ある日の暮れがたのことである。ひとりの下人(げなん)が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかにだれもいない。ただ、ところどころ丹塗りのはげた、大きな丸柱に、きりぎりすが一びきとまっている。羅生門が、朱雀大路にあるいじょうは、この男のほかに、雨やみをする市女笠や蓑烏帽子が、もう二、三人ありそうなものである。それがこの男のほかにほだれもない。



なぜかというところ、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いがつづいておこった。そこで洛中のさびれかたはひととおりではない。旧記によると、仏像や仏具を打ちくだいて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道ばたにつみかさねて、たぎぎの料に売っていたということである。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、もとよりだれもすててかえりみるものがなかった。するとその

荒れはたのをよいことにして、狐狸がすむ。盗人がすむ。とうとうしまいに、引き取り手のない死人を、この門へ持つてきて、すてていくという習慣さえできた。そこで、目の目が見えなくなると、だれでも氣味をわるがつて、この門の近所へは足ぶみをしないことになってしまったのである。

そのかわり、またからすがどこからか、たくさん集まつてきた。昼間見ると、そのからすがなんばとなく輪をえがいて、高い鴟尾のまわりを鳴きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなるときには、それがごまをまいたようにはつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、つえばみにくるのである。——もつともきょうは、刻限がおそいせいか、

一わも見えない。ただところどころ、くずれかかった、そうしてそのくずれめに長い草のはえた石段の上に、からすのふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襖のしりをすえて、右のほおにできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのをながめていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、かくべつどうしようというあてはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日まえにひまをだされた。まえにも書いたように、当時京都の町はひとおりならず衰微していた。いまこの下人が、長年、使われていた主人から、ひまをだされたのも、

じつはこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」というよりも「雨にふりこめられた下人が、いきどころがなく、とほうにくれていた」というほうが、適当である。そのうえ、きょうの空もようもすくなからず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下がりからふりだした雨は、いまだにあがるけしきがない。そこで、下人は、なにおいてもさしあたりあすの暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつという音を集めてくる。ゆうやみはしだいに空を低

くして、見あげると、門の屋根が、ななめにつきだした藁のさきに、おもたくうす暗い雲をささえている。

・ どうにもならないことを、どうにかするためには、手段をえらんでいるいとまはない。えらんでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、うえ死にをするばかりである。そうして、この門の上へ持つてきて、犬のようにすてられてしまえばかりである。えらばないとすれば——下人の考えは、なんどもおなじ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、けつきよく「すれば」であった。下人は、手段をえらばないということを肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、とうぜん、そののちにきたるべき「盗人になる

よりほかにしかたがない」ということを、積極的に肯定するだけの、勇気がでずにいたのである。

下人は、大きくさめをして、それから、たいぎそうに立ちあがった。ゆうびえのする京都は、もう火桶がほしいほどの寒さである。風は門の柱と柱とのあいだを、ゆうやみとともに遠慮なく、吹きぬける。丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへいつてしまった。

下人は、首をちぢめながら、山吹の汗衫にかさねた、紺の襦の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風のうれえない、人目にかかるおそれのない、ひと晩らくにねられそうところがあれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、さいわい門の上の楼へあがる、はばの広い、これも丹を塗つたはしが目に

ついた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀がさやばしらないように気をつけながら、わらぞうりをはいた足を、そのはしごのいちばん下の段へふみかけた。

それから、なん分かのちである。羅生門の楼の上へでる、はばの広いはしご中段に、ひとりの男が、ねこのように身をちぢめて、息を殺しながら、上のようなすをうかがっていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右のほおをぬらしている。短いひげのなかに、赤くうみを持つたにきびのあるほおである。

下人は、はじめから、この上にいるものは、死人ばかりだとたかをくくっていた。それが、はしごを二、三段あがつてみると、上ではだれか火を

とぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、そのにごった、黄いろい光が、すみずみにくもの巢をかけた天じょううらに、ゆれながらうつたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただのものではない。

下人は、やもりのように足音をぬすんで、やるときゆうなはしごを、いちばん上の段まではうにしてあがりつめた。そうしてからだをできるだけ、たいらにしながら、首をできるだけ、前へだして、おそるおそる、棲の内をのぞいてみた。

見ると、棲の内には、うわさに聞いたとおり、いくつかの死骸が、むぞうさにすてであるが、火の光のおよぶ範圍が、思ったよりせまいので、数はいくつともわからない。ただ、おぼろげながら、

知れるのは、そのなか裸の死骸と、着物をきた死骸とがあるということである。もちろん、なかには女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸はみな、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえうたがわれるほど、土をこねてつくった人形のように、口をあいたり手をのばしたりして、ごろごろ床の上にころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におしのごとくだまっていた。

下人は、それらの死骸の腐乱した臭氣に思わず、鼻をおおった。しかし、その手は、つぎの瞬間には、もう鼻をおおうことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚をうば

つてしまったからである。

下人の目は、そのとき、はじめてその死骸のなかにうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物をきた、背の低い、やせた、しらが頭の、さるのような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木ぎれを持って、その死骸のひとつの顔をのぞきこむようにながめていた。髪の毛の長いとところを見ると、たぶん女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、しばらくは息をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語りをかりれば、「頭身の毛もふとる」ように感じたのである。すると老婆は、松の木ぎれを、床板のあいだにさして、それから、いままでながめていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、さるの親がさるの子のしらみをとるよ

うに、その長い髪の毛を一本ずつぬきはじめた。髪は手にしたがってぬけるらしい。

その髪の毛が、一本ずつぬけるのにしたがって、下人の心からは、恐怖がすこしずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆にたいするはげしい憎悪が、すこしずつ動いてきた。——いやこの老婆にたいするといつては、語弊があるかもしれない。むしろ、あらゆる悪にたいする反感が、一分ごとに強さをましてきたのである。このとき、だれかがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、うえ死にをするか盗人になるかという問題を、あらためて持ちだしたら、おそらく下人は、なんの未練もなく、うえ死にをえらんだことであろう。それほど、この男の悪をにくむ心は、老婆の床にさした松の木ぎれのように、

勢いよく燃えあがりだしていたのである。

下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛をぬくかわからなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれにかたづけてよいかわからなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛をぬくということが、それだけですでに許すべからざる悪であった。もちろん、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいたことなどは、とうに忘れていのである。

そこで、下人は、両足に力をいれて、いきなり、はしごから上へとびあがった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大またに老婆の前へあゆみよった。老婆がおどろいたのはいうまでもない。

老婆はひと目下人を見ると、まるで石弓にでも

はじかれたように、とびあがった。

「おのれ、どこへいく。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、あわてふためいて逃げようとするゆくてをふさいで、こののしった。老婆は、それでも下人をつきのけいてこうとする。下人はまた、それをいかすまいとして、押しもどす。ふたりは死骸のなかで、しばらく、無言のまま、つかみあった。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、むりにそこへねじ倒した。ちようど、にわたりの足のような、骨と皮ばかりの腕である。

「なにをしていた。いえ。いわぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつきはなすと、いきなり、太刀



のさやをはらって、白いはがねの色をその目の前へつきつけた。けれども、老婆はだまっている。

両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、目を、目玉がまぶたのそとへでそうになるほど、見ひらいて、おしのようにしゅうねくだまっている。

これを見ると、下人ははじめて明白にこの老婆の生死が、ぜんぜん、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、いままでけわしく燃えていた憎悪の心を、いつのまにかさましてしまった。あとに残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就したときの、やすらかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見おろしながら、すこし声をやわらげてこういった。

「おれは検非違使の庁の役人などではない。いま

「しがたこの門の下を通りかかった旅のものだ。だからおまえになわをかけて、どうしようというようなことはない。ただ、いま時分この門の上で、なにをしていたのだから、それをおれに話しさえすればいいのだ。」

すると老婆は、見ひらいていた目を、いつそう大きくして、じっとその下人の顔を見まもった。まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、するどい目で見たのである。それから、しわで、ほとんど、鼻とひとつになつたくちびるを、なにかものでもかんでいるように動かした。細いので、とがったのど仏の動いているのが見える。そのとき、そののどから、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へつたわってきた。

「この髪をぬいてな、この髪をぬいてな、かずら

にしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答えがぞんがい、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、またまえの憎悪が、ひややかな侮蔑といつしよに、心のなかへはいってきた。すると、そのけしきが、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭からうばつた長いぬけ毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことをいった。

「なるほどな、死人の髪をぬくということ、は、なんぼうわるいことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、みな、そのくらしいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしがいま、髪をぬいた女などはな、へびを四寸ばかりずつに切つてはしたのを、干し魚だというて、太刀